

# オランダ労働組合連盟

## ～ワークライフバランス、働き方改革について～

報告者 本庄 孝夫

### 1. 概要

- ▶ オランダでは、1980 年前半に労働需給が急速に悪化し、失業率も 14%に達したが、1983 年の「ワッセナー合意」により、ワークシェアリングが普及し始めてからは、それに基づくパートタイム労働や臨時雇用を促す政府の政策により、失業率が次第に低下し、女性の労働力率も急速に高まった。「週 3 勤務」や「週 4 勤務」という形が珍しくなく、夫婦ともにパートタイマーといった多様な働き方が認められ、子育てにも時間をかけることができることから「世界一子どもが幸せな国」といわれるほどになっている。

### 2. 説明者

オランダ労働組合連盟 婦人部幹部

アンヤ・ウェースマン氏

ジェルテス氏



アンヤ・ウェースマン氏 (写真右)

ジェルテス氏(写真左)

### 3. 主な説明内容

1990年の後半から、国として女性たちも自分で生活ができるよう仕事に就くという政策をとってきている。FNV（労組）にも女性部ができ、女性に関する国への関与を強め、男女の賃金格差が徐々に少なくなってきた。その結果、事業のトップの女性の数も増え、NGOの団体においても女性が管理をする割合も増えてきている。71%の女性が仕事に就き、男性は82%となっている。そのうち、自立が得られる所得としては、女性は54%、男性は74%であり、オランダの最低生活ができる額は937ユーロ19セントとなっている。

オランダは世界でもパートタイム労働のチャンピオンといわれているが、一週のうち2～3日働く女性が多く、男性は4～5日働くことが多い。これまでは、男性が一人だけ働き、家族の面倒をみるという社会から、現在は政府も女性ができるだけ働くようにとの政策をとってきている。その結果、政府関係では30%が女性のトップとなり、大学などの学術者である教授やドクターは18%を占めている。

オランダでは、保育に対する考えがネガティブ（消極的）であった。4歳までの子どもを持っている親では46%が保育所を利用している。共稼ぎの場合、働く人が就業計画をつくり、保育の時間帯、正規の保育なのか、親類や家族の保育なのかなどの組み合わせをつくる。父親だけが働いている場合は、保育が必要な場合にはほとんど母親がすることになっている。

### 4. 主な質疑

○ オランダでは、子どもは母親が育てた方が良いという風潮があるということか？

→ オランダの文化、習慣から母親が子どもの世話をした方が良いという考えがある。しかし、子どもの母親が夜に働く場合には、昼間は母親が世話をすることになるが、政府が支援金を出すことになっており、特に、失業者や収入が少ない人には「子どもを預けて働きに出なさい」という支援が行き渡っている。

○ パートタイムのチャンピオンと説明されたが、非正規雇用の賃金水準は正規雇用に対して、日本では56.8%、オランダでは78.8%と非常に高いがどうしてか？

→ 正規であっても、非正規・契約雇用であっても1時間の賃金はCAO（労働協約）が結ばれていれば同じである。現在は、非正規・契約雇用がほとんどである。



ワークライフバランス・働き方改革について説明を聴取

しかし、それを3回続けたら正規雇用にしなくてはならず、正規雇用にしたことで年齢や経験も上積みされる。

○ ワークライフバランスで何が課題か。賃金を上げることか、保育所の整備か？

→ 政府が考えているのは、女性の仕事と家庭のバランスで、一番問題にしているのは女性が仕事に就くことである。これまで、女性の自立、社会に出て仕事に就くことが遅かったためである。最低生活費に至らない場合には、政府が支援する。どんな仕事でも、とにかく仕事に就きなさいというのが政府の方針である。

○ シングルマザーへの保障はあるのか？

→ 母親と同じ住所にすることが証明されれば、17歳までは児童手当、18歳からは奨学金が得られる。また、子ども一人に年間200ユーロまでは子どものための資金が支給される。学校へ行くにも支援金が出る。子どもが居ることで、他の部門でも支援が得られる。

○ 政府への組合の要求は何か？

→ それぞれの職種の労務状況について、組合の代表と雇用者団体、政府の三者で取り決め（CAO）がある。2005年に政府はケアと労働の条項、中心は女性が働きに出ること、同時に女性だけではなく、男性も就業を考えるという動きになってきた。この法律の中でケアの項目とバランスをとっていく考え方と短期間でも労働すること、保育することがあげられた。そのための休暇や賃金の保障が制度として確立している。

## 5. 所 感

朝7時頃には道路工事（建設）の仕事が始まる—アムステルダムのホテルの朝の散歩での光景であった。そして、午後3時ごろには帰宅ラッシュが始まるとか。日没は夜の8時30分ごろで、家族との自由な時間がたっぷりある。特に、子育て中の共働きの夫婦では、「週4日勤務」「週3日勤務」というパートタイムで平日に休みをとり、子どもと過ごす時間をつくる人が多く、「パパの日」として子どもと過ごすのはパパの役割となる。「世界一子どもが幸せな国」といわれる所以である。

オランダでは、1980年代の経済停滞を背景に働き方が見直され、同時に「女性は家で家族の世話をするのが一番」という風潮や「そもそも仕事よりも家族が土台」という価値観のもとで、女性の権利を推進する政策も女性の社会での活



躍に拍車をかけたといえる。その結果、女性が働き始めると同時に、雇用を分け合い、仕事内容を分割して労働時間を短くする「ワークシェアリング」が採用され、パートタイムを含めて「週3～4日」の勤務が増えたことが理解できた。

一方で、「年間の労働時間」が一番短い国はオランダで1,381時間、日本は1,745時間の20位、一人あたりのGDPは世界13位（日本は24位）、労働生産性は11位（日本は19位）。オランダはワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)先進国として注目を集め、2017年度

「世界幸せな国ランキング」にて6位（日本は51位）に位置している。

日本が直面している人口減少、労働力低下、少子化といった諸問題に対して、残業は法律で禁止、基本的に週休3日制、パートタイム（非正規）雇用の平均時給は2,000円、ワークシェアリングの普及で労働時間が短く、「家族と過ごす時間を追求するために働き方を改善する」—オランダが構築した「生産性と幸福を両立する豊かな仕組み」は、日本における「働き方改革」にとって大変参考になるものであった。



FMVが入る建物の前で撮影